



俳句雑誌[おき]

9月号

沖 発行所

斜

影

能村 研三

書庫のお宝

四月号の本欄で「蔵書の整理」について書いた。少し時間がとれる時には我が家にある三室の書庫の整理をしている。

本というものは、止めどもなく増殖を続ける性質を持っている。すぐ読む本、後で読む本、後で読むつもりで結局読まない本などなど。

三室の書庫に本は流砂の如くなだれこみ、結局は開かずの書庫となる。折角いただいた本と思えば捨てることが出来ずに、書庫の奥の段ボール箱からあふれ出し、部屋の床を占領している。

こうなってしまうと、必要がある本を探し出す作業は困難を極める。ある本が必要になったために時間をかけて蔵書の山を崩してゆかなければならない。そうして本の山を切り崩し、あらかた本の海に変えたあげく、結局は発掘をあきらめて、インターネットを通じて新たに買ってしまふこともあった。

この蔵書整理は現在も進行中であるが、いくらかの先行きの光が見えてきた。

淋代海岸

海霧ごめに來る波音は寧からむ

八戸・蕪島

足もとを海猫立錐の威嚇かな

種差海岸

海霧に湧く魁夷の「道」に佇ちてをり

押上ソラマチ吟行 三句

炎 帝 へ 直 立 捧 ぐ 塔 の 芯

塔ひとつ炎暑がすみに孤高なる
ソラマチの下町ぶりにラムネ買ふ
降り際の風が匂ひて盆支度
処暑の風年代順に古書括る
大仰な打水ぶりも短気なり
生身魂忘れ上手になり給ふ
やうやくに秋兆す日のビル斜影

先師登四郎の書庫からは、芝居関係の雑誌が多く出てきたので、専門の古書店にも相談したが、いくら古いものでも価値がないので引き取れないと言われた。先日句会の折り同人の須山登さんにお会いしたので、この本の話をしたところ興味があまりのようなので、貰っていただくことにした。須山さんは、先師が亡くなるちよつと前に入会した方だが、歌舞伎座でも先師と何度か会ったことがあるほど芝居好きの方なので、本が再び愛好者に読まれるようになったことはよかつたと思つてゐる。書庫の奥からは、本その他に写真や、「沖」の初期の頃の熱い志をもつていた時代の関係書類も発見され、もう一度純粋な気持で原点に戻ることを示唆してくれるものもあつた。出てきた書庫のお宝は、今の時代の方に少しでも見ていただきたく、活用方法を考えたいと思つてゐる。

蒼茫集



一切真実

遠藤真砂明

退路なき

辻美奈子

船山支那創立十周年
太陽へ手を振り海の日の出会ひ
一切真実炎天のゆるぎなし
ヨット塗りたて南に舳先向け
黒鯛躍る一本釣りの波の上
おのれ立ちあげ噴水は天に散る
絶壁を翔つ海の日の青鷹

退路なき日の炎天のハイヒール
笹舟も舵切つてゆけ夏の川
マンゴーを食べばスコールめく驟雨
南方の果実熟しぬ夏の月
今朝秋の死者は清しくおはすらむ
滝やがて真白き飛沫あげて瀧

真昼間のピヤホール 千田百里

華 礁 千田 敬

この万緑草田男ならば何と詠む
魚ごこち杜の青葉を縫ひゆけば
会へば青春真昼間のピヤホール
巴里祭夜のふらここに座す男
前山支那、遠藤へ
海の日の真砂や安房を明るうし
起きるため寝返り八月十五日

峰雲を生みつぐ安房の海の張り
十年祝ぎ礁に華の青葉潮
夏掛けを小脇抱への羽化ごこち
天井の闇と親しき熱帯夜
籠枕ふしぎと夢のモノクロに
下船して一步炎帝の贄となる

いまだ魚

北川英子

星あかり透かして烏瓜の花
ひんやりと雨後の青菽抱き括る
飛魚のかく飛び続けいまだ魚
歌舞伎座の三州瓦梅雨の艶
サイバーテロめきし黴なり戦へり
噴水の止まりて森の深眠り

凱旋

田所節子

宇宙船めく新都心てふ梅雨の駅
参道てふ十八丁の緑蔭よ
歯ざはりのきゆきゆつと茄子の漬かりよき
三伏の魚を寝かす塩麴
捕虫網蝶に遊ばれぬるやうな
凱旋旗のごと捕虫網戻りくる

藻の匂

荒井千佐代

眼鏡屋は総硝子張り新樹光
荒梅雨の水脈すぐ消えて双胴船

白南風やむかし倉庫のビヤホール
ちちははの二重虹なり駆けゆかむ
病院に屍出る道濃あぢさゐ
半夏生けだものにある藻の匂

変貌

宮内とし子

滝となる水の変貌畏れけり
スイッチバックして紫陽花の色変る
昏き程参道涼し一の宮
耳聴くゐて万緑の奥の奥
黒髪を束ねてよりの滝行者
白南風に高速艇の弧のしづき

飲む野菜

甲州千草

木下閣なればこそその香一の宮
カンナ館山支部長明るし遠藤さんの手をぎゆつと
海の日や栈橋いづこまで伸びる
おにぎりの味噌の焦げだす大暑かな
朝曇いちちにち分の飲む野菜
香水の弾みのぼりの螺旋階

岩 燕 広渡 敬雄

万緑の割れ目に滝の落ちにけり
滝壺の虹突き切つて岩燕
遠き日のミツワ石鹼蛸の夜
糸底で研ぐ庖丁や釣忍
初萩や母の形見に吾の文
初風や会葬びとの喉仏
猫 背 梅村すみを

盆景のやうな島々夏霞
天皇の田を植ゑたまふ猫背かな
ダービーの勝ち馬の肌濡れてをり
色鯉の渦なして餌を争へり
笠智衆のうしろ姿の端居かな
山椒魚この世蔑視の顔をして

号 鼓 吉田政江

夏祓号鼓の革の打たれ艶
青水無月神籬の楠香り立つ
緑さす流造りの屋根の反り
青梅雨や奉納石に八雲の字
氷旗お氷川さんの端借りて
夏越祭禰宜の立ち居の衣風

荷風伝説 秋葉雅治

水に顔浸さむばかり尊舟
豆絞りの真さらより購ふ鬼灯市
ひたすらに灼けて巨塔の街しづか
断腸亭以後曝書する文士見ず
危ふきにあそぶ荷風の土用下駄
竹夫人三日月ぐるみ焼け落ち偏奇館

夕涼み 安居正浩

夕涼み電車の音を聞いてゐる
地下書庫に黴の匂ひの乱歩集
悪病を得ての居直り立葵
燕の子生きるとは口開けること
梅雨寒のテーブルに立つお品書
箱庭の空が故郷の空になる

梅雨明くる 松井志津子

おだやかに梅雨明け高みより鳥語
梅雨明けの磯直線の子等の声
立ち上がる濤が藻を捲き梅雨明くる
海光を返す出荷を待つキャベツ

怒濤みて来て新じやがを煮ころがす
麴に噎せ晩節を汚すやも

巴里祭 林 昭太郎

蚕豆にあはき塩味われに詩
きりきりと巻き絞る傘巴里祭
先生に先生のゐて星涼し
蚕豆の葵の起伏よ来し方よ
噴煙の輪郭たしか夏旺ん
終戦日無洗米てふ米が噴き

小刻み 久染 康子

泡のあと魚の横切る箱眼鏡
透明の海月群るれば濁りけり
胸板うすき坂東太郎の生れたて
小刻みに揺るる葉先や蟬の羽化
鬼灯市残る青さの未来買ふ
茅の輪くぐる思はず首をすぼめけり

団 旗 大川 ゆかり

とびきりの真白き雲や更衣
紫陽花があぢさゐらしき色の町

十葉の芯のさみどり山の雨
なめくぢり少しうんざりしてゐるか
夾竹桃永久の祈りを捧げる日
汗の手の握りしめたる団旗かな

鹿鳴館の灯 頓所 友枝

平社 聖天二司
聖天の案内明りや白紫陽花
堂涼し鹿鳴館の灯を今に
たつた五歩の平井富士塚若葉光
兜虫掴みてよりの学者顔
ミニトマト「食べて下さい」と幼な文字
籐寝椅子窓を開ければ多摩の風

余 白 細川 洋子

絵団扇の余白の風の吹くことよ
木耳ふるふるため口を利いてをる
感情の起伏激しく泳ぐなり
太陽の受け皿として日輪草
品川駅ホーム並列夏至ゆふべ
白樺や宙の蒼さを誘蛾燈

潮鳴集



雨が好き

栗原 公子

あやふやな決意ゆらりと心太
明日とふは白きノートよ明易し
自由とは涼しかりけり淋しかり
人の世に予習はあらず明易し
あぢさゐが好き音たてぬ雨が好き

丁字のつばさ

佐久間 由子

待つといふ静けさにゐてメーンの香
羅や身ぬちの芯を正しゐて
捲き上げてつんと潮の香青簾
脈々と湧きりんりんと岩清水
栈橋は丁字のつばさ雲の峰

まつたくもつて

内山 花葉

黒南風や乗り継ぎ多き時刻表
小判形に力石擦れ宮涼し
毒となる酒ほど美味や半夏生
青鬼灯淋しきことは口にせず
みつ豆やまつたくもつて違ふ性

丸木橋

齊藤

實

手花火の消えし瞬時の闇が好き
丸木橋渡る感覚羽抜鶏
妙高に月掛りをる青胡桃
新築の家に守宮の来る吉兆
過ぎ去りしもの皆樂し浮いて来い

沖作品



能村研三選

花ざくろ土に還りし登り窯

長崎

水木 沙羅

夏菜莢や異土に果てたる陶工史

早苗月座敷に椅子の洋食屋

白南風のリフトは空のまま空へ

三文を得し涼しさの古書店主

少年につむじが二つ兜虫

市川

埴 誠一郎

燈台の影は短し瑠璃蜥蜴

夏至の雨雲州瓦の赤と黒

明易の厠に届く鳥語かな

番号で探す団地の青葉冷

火蛾舞へりどこかで原発再稼働

花槐しづかに師恩降るやうに

童女跳ぶ浴衣の袂翼にし

さくらんぼ整列解かれ白磁皿

葦原の明るき水面鳩浮巢

千葉

小河原清江

青梅雨の奥にステンドグラスかな

神奈川

菊川 俊朗

六月やこけしの首のきゆつと鳴る

半夏生一つ覚えの卵とぢ

折鶴を梅雨の深みに折り進む

短夜や入れ子のごとき夢を見て

滝しぶき浴びてへつりの行者道

千葉

石崎 和夫

メロン切る海女小屋筵巻き上げて

舵を蹴りヨット一気に沖へ向け

昼寝覚身内に魚のゆらゆらと

筒鳥や夜叉神峠雲を呼び

リラの花また間に合はぬ帰郷かな

明易や川音激し山の宿

蓮池の爆発的な緑かな

青葉若葉鳥居おほかた隠れをり

階段の紫煙灯りや夏の月

東京

五十嵐章子

沖作品 15句選評

*
能村研

夏菜莢や異土に果てたる陶工史 水木 沙羅

日本の陶工の歴史を辿ると、朝鮮との関係が浮かびあがってくる。

四百年ほど前に、秀吉の朝鮮半島出兵により、各大名が自分の領地に連れ帰った朝鮮陶工たちの喬が、いま九州等で陶芸家として活躍している。有田焼、唐津焼、薩摩焼、萩焼などの日本を代表する陶磁器は、この陶工たちによって出来たものである。作者は九州の方だから、その歴史を持つ窯元の登り窯を訪ねた。私たちが現在慣れ親しんでいる陶磁器にもわが国だけで築きあげたものでなく、異国の人たちの力を戴いたことに感謝の思いが募った。

少年につむじが二つ 兜虫 埴 誠一郎

よくつむじが二つある子は、気が強く、わがままなどと言われることがある。その反面賢い子などとはめ言葉で言われることもある。どちらも科学的な根拠があるものではないが、何かこの少年に対して特別な期待を寄せているのかも知れない。幼

少の頃から昆虫を採集して標本を作成しているような昆虫少年が、そのまま大学で昆虫学の教員になるかどうかはわからないが、その少年への特別な期待がこのつむじにつながったのかも知れない。

火蛾舞へりどこかで原発再稼働 小河原清江

東日本大震災以来、全国にある原発の再稼働については大きな社会問題となっている。作者も福島原発の問題には常に心を痛めているお一人のようであるが、これからの日本の将来を考えたとき簡単に答が出る問題ではない。そんな日本全体の葛藤を「火蛾舞へり」という季語で表現した。

折鶴を梅雨の深みに折り進む 菊川 俊朗

原爆忌の頃には、広島市の平和記念公園内ではいたる所で、色鮮やかな折鶴が見受けられる。折鶴は日本の伝統的な文化である折紙の一つだが、今日では平和のシンボルと考えられ、全国各地や、多くの国々でも平和を願って折られる。最近では「折鶴」と題した歌も流行しているようだが、原爆忌に向けて梅雨の最中鶴を折り続けた。

滝しぶき浴びてへつりの行者道 石崎 和夫

へつりとは登山の用語で、主に沢の遡行時などに、足場を探しながら水流や川岸の脇の岩場などを横へ横へと移動することを言う。行者は、山の奥深くに入り込み、険阻な道で滝しぶきを浴びることも厭うことなく過酷な修行が続く。福島県の南会津の塔のへつりは有名で、会津方言で、川に迫った険しい断崖のことであるようだ。(以下略)